

## I 導入部

おはようございます。4月の第二日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に私たちの救い主イエス様を賛美し礼拝できますことを感謝致します。先週はイースター、イエス様が死から蘇られたことを記念する礼拝でした。3名の受洗者、1名の入会者が与えられましたこと心から感謝致します。今日は聖餐式が行われますので、先週洗礼を受けられた方々が、クリスチャンとしての最初の記念すべき聖餐に預かるのです。

新しい年度が始まり、第二週目に選びました聖書の箇所は、先週の次の箇所、ルカによる福音書24章36節から49節を通して、「人は心と体で生きている」という題でお話し致します。

## II 本論部

### 一、魚を食べて復活されたご自分を証明されたイエス様

36節の最初に、「こういうことを話していると」とありますが、それは34節、35節の「本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。」ということをお話しているとです。リビングバイブルには、「ところが、この話の最中に、」とあります。

復活されたイエス様がペトロに現れたこと、クレオパともう一人の弟子が、イエス様が共に歩き語って下さったこと、その時心が燃えていたこと、パンを裂いて下さった時、イエス様だと分かったこと、復活のイエス様を見たという話をしていた時、「イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。」とあります。リビングバイブルには、「だれもかれも幽霊を見ているのだと勘違いし、ぶるぶる震えています。」とあります。「イエス様が復活されたんだ！」と話し合っている所に、イエス様ご自身が弟子たちの真ん中に立ち「シャローム・ラーカム」と言われたのです。「あなたがたに平和、平安があるように」と言われたのです。平安とは心穏やかな状態のようです。ユダヤ人にとって、心が穏やかになるとは、神様が共におられると感じる時なのです。キリスト者である私たちも、インマヌエル、神様が、イエス様が共におられることを確信する時、私たちがどのようなマイナス、最悪な状況であっても平和、平安を感じることができるのでしょうか。イエス様の姿を見て声を聴いた弟子たちは、喜びにあふれたのかというとそうではなく、「恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。」のでした。イエス様が十字架で死んで、師であるイエス様を失って悲しみの中にある弟子たちに、平和や平安のない弟子たちに、「あなたがたに平和があるように」と声をかけられたのです。しかし、イエス様に声をかけられても、恐れて、イエス様の姿が亡霊を見ていると恐れしました。イエス様の復活を信じませんでした。イエス様を見捨てて逃げてしまった自分たちの目の前に、「うらめしや」ではありませんが、イエス様の亡霊が現れたと勘違いしました。38節、39節には、「そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。わた

しの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおりに、わたしにはそれがある。」こう言って、イエスは手と足をお見せになった。」とあります。イエス様は、弟子たちの疑いの目に、ご自分を示されました。十字架につけられた傷を見せられたのです。「触ってよく見なさい。」と、見るだけではなくて、ご自分の体に触ることさえ許されたのです。確かに十字架で死んだ間違いない、ご自身を見せられたのです。4 1 節から 4 3 節には、「彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。」とあります。イエス様をご自分の傷を見せて、弟子たちは、「彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので」とあります。リビングバイブルには、「うれしいにはうれしいのですが、まだ半信半疑です。」とあります。弟子たちは、確かにイエス様の姿を見て、触れたのかも知れない。喜んだのには喜んだ。その喜びによって、信仰が確かなものになったのではありませんでした。その復活の事実を不思議に思っている弟子たちに、イエス様は「ここに何か食べ物があるか」と言われ、焼いた魚一切れを出すとイエス様は食べたのです。イエス様は言葉で説明するよりも、食べるという行為で生きておられることを示されたのでした。イエス様は、ご自分が復活したことをなかなか受け入れることができない弟子たちを叱ったり、裁いたり、切り捨てたりするのではなく、彼らにとって、受け入れやすいように、やさしくご自身を示し、傷を見せ、食べることを通して安心させたのです。イエス様は、私たちが理解できない時、受け入れられない時は、無理やり説明してわからせようとされたり、強制的な力でねじ伏せようとするのではなくて、相手がわかるように理解できるように愛をもって示して下さるのです。

## 二、自ら近づいて弟子たちとの関係を修復されたイエス様

イエス様は、どうして復活されたご自分を弟子たちに示されたのでしょうか。2つのことが考えられるのでしょうか。1つは、イエス様の十字架の死によって、イエス様を見捨てた弟子たちとの間に、壊れてしまった関係性を元に戻すということが考えられるように思うのです。もう1つは、イエス様の十字架と復活、つまり福音を全世界に出て行って宣べ伝える使命を弟子たちに与えるためだと思うのです。3 5 節の「本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。」とあるように、イエス様を三度も知らないと否定したシモン・ペトロにイエス様はまずご自身を現わされたのでした。イエス様の方からシモンに近づいて関係性を回復されたのでした。ヨハネによる福音書 2 1 章には、イエス様がペトロに、「わたしを愛するか」と三度問われ、羊を養うようにと新しい使命を与えられたことによって関係を回復されたことが記されています。イエス様が、弟子たちの真ん中にたつて「あなたがたに平和があるように」と語られたのも、イエス様を見捨てたという弟子たちの負い目や傷を癒し、弟子たちとの関係が壊れかけていたものを回復するためであったように思うのです。まだまだ平安ではない弟子たちに、復活されたご自分を示し、傷を見せ、魚を食べることで、イエス様が復活されたことを弟子たちにはっきりとわかるように導かれたのでした。4 4 節を見ると、「イエスは言われた。「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあな

たがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」とあります。リビングバイブルには、「以前、いっしょにいた時、モーセや預言者の書いたこと、それに聖書（旧約）の詩篇にあることはみな、必ずそのとおりにになると話して聞かせたはずです。忘れてしまったのですか。」とあります。イエス様の苦しみや十字架の死、埋葬、三日目によみがえらされるということは、旧約の時代から神様が計画されていたみ業であり、それは聖書に示されていたことであること、弟子たちと3年少しの間生活し、神様のみ業をなし、神様の言葉を語ってきたイエス様こそが聖書が示しているメシアであることを示されたのです。45節には、「そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて」とあります。リビングバイブルには、「イエスが弟子たちの心の目を開かれたので、彼らにも、やっと納得がいきました。」とあります。復活の主イエス様が弟子たちの心を開いて下さったように、今は聖霊なる神様が私たちの心を開いて聖書の言葉、み言葉を悟らせて下さるのです。

イエス様が3年と少しの間、弟子たちを訓練されたのは、彼ら自身がイエス様に弟子として召された使命があるということであり、そのことを悟るために、理解するために心を開いて下さったのです。46節から48節を見ると、「言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。」とあります。イエス様の十字架と復活、つまり福音はエルサレムから始められるということです。ペンテコステはエルサレムで弟子たちが聖霊を受け、エルサレムから福音が全世界へと伝えられていくのです。48節、49節には、「あなたがたはこれらのことの証人となる。わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」とあります。イエス様は復活されてから40日間、弟子たちや多くの人々に証しし、天に帰って行かれるのです。そして、10日後の弟子たちや共に祈る人々に聖霊を与えられるのです。そのために、父の約束を受けるためにエルサレムにとどまることを命じられるのです。イエス様は、復活されたご自身を示されただけではなく、聖書を示して聖書にご自身のメシアであることを指し示されたのです。

### 三、神の言葉に自らの復活を証明されたイエス様

先週お話したように、イエス様は、クレオパともう一人の弟子には、「ほら、わたしが復活したイエスだ」とは言いませんでした。聖書の言葉からご自分のことをお示しになりました。今回は、弟子たちが幽霊だと恐れていたので、ご自分の傷を示し、復活したことを目に見える形で示されたのです。それは、弟子たちが、復活されたイエス様は、シモンに現れなさったとか、クレオパとも一人の弟子は、イエス様がパンを裂かれた時、イエス様だと分かったこと、イエス様が自分たちに加わり、道々話していた時、心が燃えていたというイエス様の復活を目にしたという状況から、弟子たちにはっきりと傷を見せ、十字架に確かにつけられたご自分が復活したということをご自分の体を見せて、特に魚を食べるといった人間の日常生活のありふれた様子を通して証明されたのです。そして、それだけではなく、やはり旧約聖書には「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書

いてある事柄は、必ずすべて実現する。」とメシアご自身であるイエス様が、十字架につけられ、苦しみを受け、墓に葬られて三日目に復活するということが書いてある、聖書の言葉に真実があることを示されたのでした。そして、聖霊を受けた弟子たちが、イエス様の十字架の死と復活、福音を全世界の人々に語るという使命があることを示されました。

復活という出来事は、人間の理性では受け入れることのできない事柄です。実際復活されたイエス様を見ても、弟子たちは亡霊だと恐れ戸惑ったのです。イエス様は、「**見ないのに信じる人は、幸いである。**」とトマスに言われましたが、弟子たちは、復活されたイエス様を見てもなかなか信じることができませんでした。けれども、なかなか信じることのできなかつた弟子たちは、イエス様を見て、イエス様の言葉を信じてエルサレムにとどまり、祈り続け、ペンテコステに聖霊を受けて、イエス様から聞いた言葉と自分たちで見た、イエス様の十字架の死と復活、福音を携えて、命を懸けて伝えて行ったのです。もし、イエス様の復活がなかったとしたら、弟子たちの命を懸けての福音宣教は、無意味であり、無駄であったこととなります。イエス様の復活は事実であったからこそ、弟子たちは自分たちの命をかけて、自分の命を犠牲にしても福音を宣べ伝えたのでした。「**そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。更に、わたしたちは神の偽証人とさえ見なされます。なぜなら、もし、本当に死者が復活しないなら、復活しなかったはずのキリストを神が復活させたと言って、神に反して証しをしたことになるからです。**」(Iコリント 15:14-15) また、今までは土曜日を礼拝の日としていましたが、イエス様が日曜日に復活されたことを記念して、日曜日に礼拝がささげられるようになったということも復活の事実の証明になるのでしょう。日曜日はイエス様の復活を記念する日なのです。パウロは言いました。「**しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。**」(Iコリント 15:20) と。

### III 結論部

イエス様の復活を信じて生きるとは、神様の恵みが十字架と復活を通して、私たちの罪と死の力に勝利したことを信じて、私たちが経験する苦しみや悲しみ、死や絶望をも神様の力によって打ち砕いて下さったことを信じて、新しく神様と共に、イエス様と主に生かして下さいということをして信じて生きることなのです。また、聖書に、神様の言葉にイエス様の十字架の死と復活、福音が実現したことを信じて生きることなのです。

信仰者である私たちは人間としての失敗や困難、欠点でさえ、イエス様の十字架の恵みと復活したイエス様の栄光の傷から輝き出る光に照らしてみるなら、私たちの全ての罪が赦され、義とされ、清められ、死んでも生きる命、復活の命、永遠の命が与えられていることを信じて生きることが、イエス様の復活を信じて生きることなのです。霊的な生き方とは、この世離れした生き方を指すわけではありません。イエス様は食べることを通して復活の事実を示されました。私たちは、食事を通して健康が支えられるように、聖書の言葉、み言葉を通して、魂に、心に養いが与えられるのです。心も体も神様に守られるために、聖書の言葉に触れて、信じて、この週も、全ての重荷をイエス様に全てをお任せして、委ねて歩んでまいりましょう。